国府台女子学院 小学部だより

市川市菅野3－24－1
Tel　047－322－5644
Fax　047－322－5655
https://www.konodai-gs.ac.jp/

２０２５年６月号　　６月５日発行

輝け！がんばりオーラ！！

運動会本番がもうすぐです。「八木節」や「マツケンサンバ」の鼓笛練習の音楽が耳から離れない毎日です。

運動会を通して、全力でがんばる力、協力する力、役割を果たす姿勢を育てていきたいと考えています。

子どもたちの真剣に取り組んでいる姿や練習を重ねるごとに上手になっていく姿に日々感動しています。

一所懸命がんばる姿が一番輝いている姿であり、がんばっている時には光り輝くオーラが見えると思っています。

一所懸命に練習して、当日の競技や演技の時、係の役割の時、応援する時など、見ている人たちがまぶしいと感じるほどのみんなのきらきらオーラを見せてあげましょうと、今年も全体練習の初日に子どもたちに話しました。

当日の子どもたちの輝く姿に保護者の皆様の熱い応援をよろしくお願いします。

６ 月 行 事 予 定

2日　運動会予行
6日　運動会準備(午前中授業)
7日　運動会
9日　仏教朝礼
10日　クラブ
13日　1年生校外学習
14日　休業日
16日　朝会
17日　クラブ
18日　第2回学校見学会
　　(受験希望者対象)
19日　健康診断予備日
21日　4年生高原学校説明会
23日　仏教朝礼
24日　小･中･高授業公開
　　クラブ
25日　第3回学校見学会
　　(受験希望者対象)
27日　4年生社会科見学
28日　休業日

7月1日　職員会議

気持ちを切り替えて

まもなく梅雨入りですが、梅雨の間は、空気がじめじめして、洗濯物が乾かなかったり、外出が億劫になったり、何となく憂鬱な気もちになりがちです。

でも、先日の雨降りの日、1 年生がランドセルについた水滴を楽しそうに触っているのを見かけました。子どもの頃を思い返してみると、雨降りの中、長靴をはいて、レインコートを着て、お気に入りの傘をさして水たまりを歩いたり、雨に濡れてしまったりしたことも楽しかったのを覚えています。雨の日も嬉しかったなあと思いだしました。

どんなことでも楽しもうという気持ちがあれば、楽しい出来事として受けとめられます。

日々忙しく、ついつい子どもを急かしてしまうときにも、ちょっと気持ちを切り替えて、一呼吸待ってみる。すると、丁寧に行動している子どもの姿が愛おしく見えてくるかもしれません。

平和への願いを込めて

毎年、６年生は修学旅行の事後学習として作文を書き、新聞社の投書欄に投稿しています。

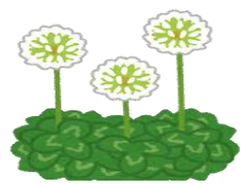
沖縄で見て聞いて体験して感じたこと、戦争があったという事実、現在も戦争が起きている国があるという事実、平和であることのありがたさ、未来に向けての願い等、皆真剣に考えた思いが綴られていました。

今年は、6 月 3 日付の読売新聞朝刊に２名の児童の作文が掲載されました。

今 月 の 目 標

「正しい言葉づかいをし、礼儀正しくしましょう。」

善と悪について

世の中に溢れる戦争、事件、事故、不正などのニュースを、毎日、目にする内に、私たちは安易な「あきらめの心」に執われてしまっているように感じます。世界に目を向けるとロシアのウクライナ侵攻、イスラエル軍とハマス（ガザ地区）間の武力衝突が収束の兆しを見せない今、「どうせ何も変わらない」とあきらめの声が聞こえます。しかし、仏教の教えの「諦念」はただの「あきらめ」ではなく、その先にある「あきらか」にする道を示しているのです。お釈迦様は、人が苦しみの輪廻から抜け出すためには、まず、物事をありのままに観察する正見(しょうけん)を養うことが重要だと説きます。正見とは世界と私の苦しみ(惨状)を直視しつつも、過度な悲観にならず、冷静に状況を理解することです。この正見に基づけば、私たちを苦しめるのは、現象・事象そのものではなく、それに対する私たちの執着(しゅうじゃく)の心であることが見えてきます。国家、民族、家族、そしてこの「私」中心の平和を望むという執着が、世界をより複雑にし、人の業の苦しみを深めているのだと思います。

以前 6 年生の「仏教」の授業で、『歎異抄』をテキストとして「善」と「悪」の定義について児童たちに考えてもらう機会がありました。「善悪の定義」は時代や文化で変遷します。例えば「人を殺してはいけない」という倫理観は多くの教え(宗教･道徳･法律)の根幹にあります。それにもかかわらず人類史は戦争や紛争という「殺人」で溢れています。なぜ「不殺生」という普遍的な教えを持ちながら、人はそれを破り、「正義」や「国家」の名の下に、他者の命を奪っていくのでしょうか。親鸞聖人の「さるべき業縁のもよほせば、いかなるふるまひもすべし」という言葉は、人は置かれた状況によってどのような所業も行ってしまうことを示唆します。「人を殺してはいけない」という普遍的な教えを守るには、単なる倫理規範の遵守だけでなく、私たち一人ひとりが自らの内にある「悪」の可能性を自覚し、謙虚に向き合うことが不可欠と示しているのです。「悪人の自覚」こそが、自分が「正義」であると思い込んで、他者を絶対的な「悪」として断罪せず、共に弱さを抱える人間として認め、許すことで「共に生きる」ことへの第一歩となるのではないでしょうか。